

■ 体験版 ■

壁穴の向こうで今日のお当番が待ってるっ ♡

□ Situation 1. クールビューティの介助 □

夏目 なつめ

棗 なつめ

□□注意事項 □□

普通にこのPDFファイルを開くとウィンドウサイズで開きます。パソコンの設定にも拠りますが多少縮小されて表示されるのではないかと思います。文章を読むには問題ありませんが、CGを鑑賞する場合は多少拡大（125%くらい推奨）して戴いた方が綺麗に表示される筈です。

また、「Shift」＋「Ctrl」＋「N」で希望の頁へジャンプできます。

□□登場人物□□

● 芦川 杜乃(あしかわ もりの) || 鬼董学院(きとうがくいん) 二回生。身長… 163 cm、体重… 45 kg、スリーサイズ… 84(Cカップ)・49・78。けしてお高く留まっているという雰囲気ではないが『本が友だち』な人で「クールビューティ」とでも言えば良いか、何気に他人を遠ざけるオーラがあった。けれど、人付き合いが苦手なだけで本当は大和撫子な性格の持ち主。文芸部で図書委員。



● 中台 温子(なかだい あつこ) || 鬼董学院二回生。身長… 159 cm、体重… 58

kg、スリーサイズ・97(Gカップ)・63・89。バストが小さくなると聞いて水泳部に入ったのだが、いつの間にかやら水泳部のホープに。真っ黒に日焼けしている事と太腿にも筋肉がついたのが悩みの種。 介助委員。



- 竹之下 崇 (たけのした たかし) 〓 鬼董学院二回生。父親の転勤で二週間ほど前にこの学院に編入してきた。真面目な " お坊ちゃま " くん。
- 平嶋 哲生 (ひらしま てつお) 〓 鬼董学院二回生。 " お調子者 " で情報通。

その壁には五センチ程の“穴”が開いていて向こう側からカーテンで閉じられていた。そして、テーブルの上にバインダーに綴じられた記入用紙の束があった。

- 松コース ↓ 一、〇〇〇円
- 竹コース ↓ 三、〇〇〇円
- 梅コース ↓ 五、〇〇〇円 (G、B)
- スペシャルコース ↓ 時価
- 指名料 ↓ 一、〇〇〇円 + α ()
- マイクON ↓ 一、〇〇〇円
- 隠語プラス ↓ 三、〇〇〇円

「な、何……これ？」

記入用紙に並ぶ文字列と金額に途惑って平嶋哲生(ひらしまてつお)を振り返ると彼が、にまっ、と笑って愉しそうに説明を始めたのだった。

「『松コース』が『手コキ』な……んでもって、『竹コース』が『フェラ』よお……んで、『梅コース』は二種類あって、『フェラでゴックン』して貰うか、『フェラの前にペロチュウ』して貰うか選べるのさ♪……もともとお、相手がOKしてくれればの話だがな……むひよひよっ♪」

下碑た笑いを浮かべる哲生の顔を見て、竹之下崇(たけのした たかし)は彼の誘いに乗った事を少し後悔し始めていた。

昨日の昼休み、哲生は崇を屋上に連れだして声を響(ひそ)めて訊いてきたのだった。「崇よお……芦川ともつと」お近づき」になりたいだろ？」

確かに崇は、芦川 杜乃(あしかわ もりの)に淡い想いを抱き始めていた。

二週間ほど前、彼はここ——貴董学院(きとうがくいん)に、二回生の二学期という中途半端な時期に編入してきたのだった。まあ、今までもたびたび父親の転勤で転校を繰り返してきたのだったが、中々慣れる事はなかった。

そんな崇に親しげに声を掛けてくれたのが哲生と中台 温子(なかだい あつこ)だった。哲生は、まあ何処のクラスにも一人は居る「お調子者」で最初から馴れ馴れしく話し掛けてきたのだったが。正直言って崇はこういうタイプは苦手なのだが、新し

い環境に馴染む為には彼の “ 情報 ” は役に立った。

一方、温子は『介助委員』というあまり聞き慣れない役職だったが、まあ、崇のような中途編入者の面倒を見たりするのが仕事なのだろう……と、その時は思っていた。そして、気さくでお喋り好きな温子は何かと気に掛けてくれて、まだ教科書の揃わない崇の為に隣の席の女子に授業中一緒に見せて貰うよう頼んでくれたりした。

その、たまたま隣の席が空いていた（単に、最後列の角なので空いていたのだろうが……）所為で “ お隣さん ” になったのが杜乃だったのだ。

杜乃は美少女揃いのこのクラス（↑哲生の “ 情報 ” だが）でも、一際目立つ存在だった。実際、担任が崇に彼女の隣の席を指示すると、クラスの男子から殺意の籠った視線が何本も飛んできた気さえた。彼女は、けしてお高く留まっているという雰囲気ではないのだが『本が友だち』な人で “ クールビューティ ” とでも言えば良いか、よく窓際で文庫本を広げている姿は他人が近づき難いオーラを発散していた。

だから多分、崇一人では杜乃に机を寄せて見せて貰うように頼み込む事などできなかっただろう。その意味では教科書が揃うまでの三日間は嬉しくもあり、しかし、息苦しくもあつた。間近に覗き見る彼女の頬の産毛にドキドキし、シャンプーだろうか灰かに香る良い匂いに崇は興奮を抑えるのに必死だったからだ。

しかし、三日間で何かが起こる訳もなく、崇と杜乃の距離はまた「ただのクラスメート」に戻ったのだった。いや、机を寄せていた三日間も、時たま言葉を交わしたくらいで格別親しかった訳でもなかったのだが。

『もっと「お近づき」になりたいだろ?』と、崇の心裡を見透かしたような哲生の言葉に彼は頷いてしまっていた。

そして、哲生はメールで崇にあるオークションサイトを転送して寄こしたのだった。そこは、貴董学院『介助委員会』主催のチケット購入の為のオークションであった。

「……………」

疑問一杯の顔で見返す崇に哲生は自慢げに話し始めた。

「これはな、ここいらの他の学院ではちいっとお眼に掛かれないっつう……毎週一回お目当ての女子と「お近づき」になれるイベントよおっ!……しかもだ、学院側も公認というありがたいシロモノよお!」

「……………そ、それって……合コンとか、ダンスパーティー……とか?」

「うん……まあ、似てるような、違うような……とにかくだ、毎週ごと金曜の昼休みに、その週の週番が『お当番』になって「介助」してくれる……つちゅう、ありがたい催しなのよっ♪」

「……………っ？」

何やら少し怪しげな表現に崇がますます小首を傾げると、哲生がもったいぶって付け加えた。

「今週のウチのクラスの週番……誰だか知ってるだろ？」

「あっ！」

崇は黒板の隅に書かれていた名前を思い出した。

一人は杜乃だった。もう一人は……………思い出せなかったが。

そういえば、彼女は今週、そわ、そわ、していて何処か落ち着かない様子だった。

「芦川は人気があるからな……いいか、そのチケットは三〇枚限定だから、絶対、落

札しろ(おとせ)よっ！」

「えっ……………う、うん……………そ、それで締め切りは、いつ？」

「今日の授業終了後の一時間後だっ！……………落札すつと振り込み先の連絡がくるから明日の朝一〇時までには忘れずに振り込むコトっ！……………忘れんなよっ！……………ああ、それとお、俺の分と二枚なっ！」

「えっ！……………もしかして……………平嶋くんの分も僕が払うのかい？」

「んだよお？……………情報料としたら、安いモンだろ？」

「ま、まあ……いいけど……」

「心配すんなって……最近、机くっつけて肩触れそうにしてよ……芦川と仲良いじゃねーか……断られねーって！」

（まっ……今まで芦川が当番の時にホンバンOKしたコトはなかったつう噂だが……こいつなら、もしかして……）

「あ、あれは……きよ、教科書見せて貰ってただけで……そ、それに……おはようの挨拶とか……黒板の字が読み辛い時に訊いたり、とか……」

「んなコト言ってるけどよお、芦川の匂い嗅いで興奮とか、してたんだろお？」

「ば、ば、莫迦な事……いい、言わないで……」

その時、崇は大事な事に気がついた。

「……あ、あれ？……平嶋くんの分もって……も、もしかして平嶋くんも芦川さんを狙って？」

「アホお！……俺は、咲夜っち先輩に決まってるぜえ！」

『咲夜っち先輩』とは三回生の東風谷 咲夜（こちや さくや）先輩の事だ。三回生なのに一回生にしか見えない、何と言うか “ロリ体型” の先輩だ。

崇は一度紹介されたのだが、何で中途編入生を上級生に紹介するのか判らなかった。

もしかしたら、彼をネタに咲夜先輩と話をしたかっただけかも知れなかった。実際、彼女は迷惑そうに、ちらつ、と崇と哲生を見ただけで行ってしまったのだが。

そんな訳で、崇はいま、哲生から『松コース』と『竹コース』と『梅コース』の説明を受けていた処であった。

「……………と、という事は……………ま、まさか『スペシャルコース』って……………」

続いて記されていたコース名に崇の心臓は破裂しそうだった。

「おおよっ♪……………マンコで、にゅっぽり、ってヤツよお！」

(や、やっぱりっ！……………と、いう事はっ!?!……………あ、あ、芹川さんで……………しよ、しよ、初体験——っ!?!)

崇の緊張は極限まで達していたが、その先の文字が眼に入る。

「で、でも……………じ、『時価』って……………な、何っ?」

「まあ、相場は諭吉が二枚ってトコだな?……………だから、金持ってこいつって言っただら?……………幾ら持つてるんだ、見せてみろっ!」

哲生は崇のズボンの尻ポケットから財布を抜き取ると中を覗き込んだ。

「お、おい、おい、マジかよお!?!……………ひいの、ふうの、みいの……………諭吉五枚って……………」

…オメエって、良いトコのボンボンだったのかよっ！」

「そ、そんなんじゃないって……お、お年玉をさ……買いたい物もなかったから残ってただけだよ……」

（お年玉に諭吉五枚って……こいつ……マジで金持ちのボンボンだっ！）

（は、半分しか持ってたのこなかったのは内緒にしといた方が良さそうだね……）

「そ、それより……この『指名料』とか『マイクON』とかいうのは？」

「おお、そんじゃ、俺の申し込みをしながら説明してやるよっ！」

哲生はバインダーに挟んであったボールペンを取ると申し込み用紙に記入し始めた。「まず『梅コース』で『G（ゴックン）』とお……この頭んトコの『□』のチェックを入れてくんよ……んで、『指名料』もチェックして『咲夜っち先輩』とお……まあ、ホントはイニシャルでって決まりだが誰も守ってねえけどな……ああ『+α』ってのは多けりゃOKしてくれる可能性が高くなる……って噂だけだな……」

次の『マイクON』ってのは、向こうもこっちもヘッドセットを付けていて壁越しに会話とかするんだが、いざ行為が始まると向こうはマイクを切るのが決まりになる。しかし、だっ！……この『マイクON』にして貰うとフェラしてる、じゅぶ、じゅぶ、という音や、『スペシャル』で、ズコ、バコ、やってる時のあんあん声なんか

がこっちの耳にステレオで聞こえてきてな、そりゃあもお、エロいの何のつて……。

んで、最後の『隠語プラス』つてのはよ、更にあんあん声と一緒に無修正隠語を喋り捲つてくれるつて寸法よお！……俺は勿論、両方チェックなつ……。これで丁度、諭吉一枚だから、つとお……んじゃ、ゴチになるぜえ♪」

そう言つて哲生は崇の財布から一枚抜くと残りを彼に返して寄こした。

「ちよ、ちよつと待つてよう!？」

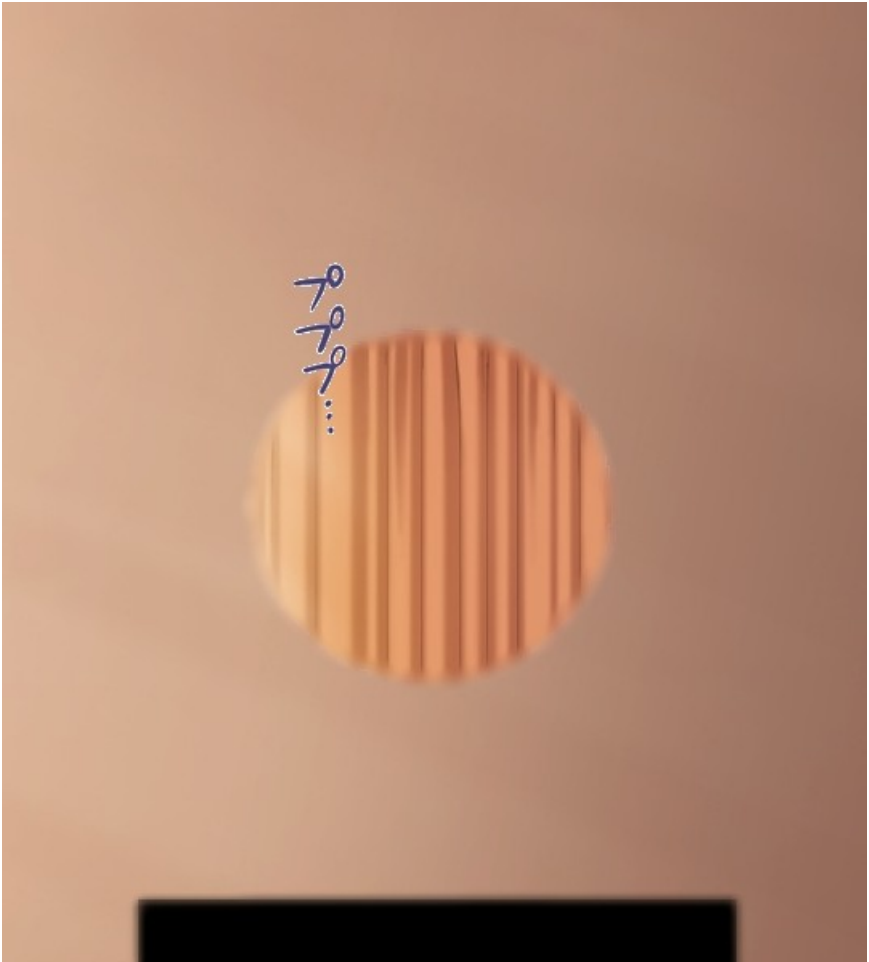
「いいじゃねーか、指導料つてモンよお！」

「だって、同じような事言つて、チケット代も払わせた癖にっ！」

「まあ、まあ、その代わり、オメエの『芦川のスペシャルコース』をすっかり頼んでやつからよつ……んで、書き終わったら金と学生証と一緒に、ほれ、この下の隙間から入れて受け付け完了つて寸法よっ！」

すると、カーテンの向こうでパソコンのキーボードを操作するような音が聞こえ、次いで何故か笑いを堪えるような声が聞こえた。

「はい、平嶋 哲生(ひらしま てつお)クン、チケット代の入金を確認しました。毎度毎度……うぷつ……ありがとうございます……つたくう、ホントに、毎週、毎週、アンタも好きねえ！」



カーテンの向こうから聞こえたのは何処か聞き覚えのある声だった。

「う、うつせえっ！……毎週なんて来てねーってのっ！……それより、さつさと受け付け済ませろってのっ！」

「あら、あら……いつもは『英世コース（↑つまり『松コース』オンリーという意味だ）』の癖にい……今日はどうしたのお？」

椰揄（からか）うような声の意味ありげに跳ねあがった。

「そっか、そっか……今日は東風谷先輩も居るわねえ……この、ロリコンっ！……つてか、アンタ『ごっくん』は無謀じゃないのお？……拒否られても、返金しないわよお？」

「い、いいから、さつさと……」

不毛な言い争いを終わらせようとした哲生の言葉を遮って彼女が言った。

「……あらっつ、残念ねえ、平嶋助平クンっ♪……たった今あ 東風谷先輩はご指名が入りましたっつ♪」

「お、お、俺の方が早かったらお!？」

「まだあ、入力の中ですう……先のお客さまが終わるのお、お待ちになりますう？……それともお、あたしならあ、この諭吉さん一枚でえ、スペシャルOKよお？」

「だ、誰が中台の腐れマンコに一万も払うかってのっ!？」

「ぬあんですってーっ!?!」

不毛な言い争いは更に熱を帯びてしまった。

(や、やっぱり中台さんの声だったんだ……)

崇は漸く彼女の『介助委員』というあまり聞き慣れない役職の本当の意味を理解したのだった。

やがて、言い争いの最中も温子はパソコンを操作して受け付けを完了したようで、下の隙間から学生証だけが戻ってきた。

「はくいつ! ……スケベでロリコンの平嶋哲生くんはくあ S・K先輩の空き待ちになりま〜すっ! ……『一番』の扉の前でオチンポおっ勃ててお待ちくださ〜いっ♪ ……でもお、三人目だから、昼休み終わっちゃうかもお?」

「な、何で三人目だよっ! ……一人目だろっ、二人目っ!!」

「アンタが、ごちゃ、ごちゃ、言ってる間にもう一人ご指名入りました〜っ!」

「んな、バカな〜っ!」

「あの〜う……申し込み終わったなら代わってください……」

その時、背後から控え目に声が掛かって哲生が振り返った。

「まだ、こいつのが済んでねーから、隣の窓口に行きやーがれっ!」

温子との言い争いの勢いそのまま怒鳴った哲生の剣幕にその男子は、すご、すご、と隣のスペースに移っていった。

「そんじゃ、ほれ崇っ！……早く書けよっ！」

哲生が寄こしたバインダーを受け取り、崇はボールペンでチェックを始めた。

(……ま、まず『指名料』にチェックして……ええと、イニシャルだと……M……Aかな？……)

「バカだなお前っ！……『ラブラブ杜乃ちゅわくん♥』って書くんだよっ！」

横から覗き込んでいた哲生がそう言うと、カーテンの向こうから咳払いが聞こえた。

(あ、後は……す、『スペシャルコース』にチェックして……『マイクON』と『隠語プラス』も……ちえ、チェック……つと……)

全てチェックを終えた崇は、申し込み用紙の上に学生証を載せ、哲生から隠すようにして財布の残りの札を全て用紙の下に忍ばせると緊張しながら壁の隙間に押し込んだのだった。

またパソコンを操作する音が聞こえ、抑揚のない声で温子が言った。

「竹之下 崇(たけのした たかし)くん、チケット代の入金を確認しました。ありがとうございます。……まあ、誰かさんに唆(そそのか)されたんでしょうけど……竹之下

クンも男の子だったってコトね……」

幾分揶揄の混じった言い方に崇は身を竦めた。

「ご、ご免なさい……」

「ああ、謝るコトじゃないから……それに、あたしが言えた義理じゃないしい……」

「おおよっ！……ヤリマンの中台に言われたくねーよなっ？」

「そこっ！……外野、煩いからっ！……アンタはとつと『一番』の扉の前に行って先の男子がヨガる声でも聞きながら待つてなさいってのっ！」

「う、うっせーっ……てばよっ！」

「こほん……それじゃあ、竹之下クンは初めてだからルールとか説明しますね……」

一つ咳払いをしてから温子は話し始めた。

「先ず覚えておいて欲しいのは、ここで行われる行為は、所謂『援助交際』とかではなくて、『介助』だというコト……これを忘れないでね？……ほら、青春にムラムラは付き物よね？……それを『介助』する、というコトです。」

辞書に拠れば『介助』とは、『病人や障害者・高齢者などに付き添い、起居動作の手助けをすること』とあります。……だからね、ほら『起こして』あげたりい……その後も『動作の補助』なんかして『手助け』してあげるのよお……判るでしょおっ？

……つまりい、青春特有の『病』を解消する『手助け』をしているのよねっ♪」

「モノは言いようだよな〜っ！」

「アンタ、まだ居たの？」

「ヤッてることあ、『援交』そのモノだったのっ！」

「毎週利用してる アンタが言うなっ！……まあ、学院側に “筋を通す” 必要があるから、ねっ？」

（『筋』だけでなく『上納金』も通してるけどね……）

「と、言う訳で……『介助』する『お当番』には『拒否権』があります。この相手はゴメンなさい、というケースから……このコースまでならOKという場合まで様々ですけどね。つまり、指名した相手から拒否られたり、コースのランクが下げられる場合もあるってコト……」

温子は注意を喚起するように一旦言葉を切ってから続けた。

「……ただし、どの場合でも、申し込み時の代金は一切返金できませんっ！……つまり、『ゴメンなさいのケース』の場合、何もして貰えないで代金のみ支払うコトになるの……あるいは、『梅コース』の代金で『松コース』しかして貰えなくても異議は認められませんっ！……ああ、それに就いて 後で本人に詰め寄ったりすると、『介

助委員会』の恐いお兄さんたちが駆けつけるから、しない方が良いわねっ♪」

崇は先ほど申し込み用紙の下に忍ばせた四枚の「諭吉さん」を思い浮かべて少しだけ後悔し始めていた。それを見越したように温子が言った。

「まあ、竹之下クンは初めてだから、今回に限り申し込みの変更をしても良いわよ？……それと、ついでに言っとくとお……拒否られた場合、手の空いてる『お当番』さんや、あたしたち『介助委員』が代行するコトもできます。この場合は、逆に『拒否権』はあなたたちにあります。」

つまり、竹之下クンが例えば今日『スペシャルコース』を申し込んだとして、相手に拒否られた場合は、あたしが代わりに『スペシャルコース』を受けてあげられるけれど、あたしが相手じゃノーサンキューでも良いってコトっ！……勿論代金は返金しない代わりに「恨みっこナシ」よっ♪」

隣で哲生が何か言いたそうだったが、崇は心を決めて答えた。

「そのまま受け付けをお願いしますっ！」

「うん、判ったわ……ええと、誰がお望みか……つと……あら、うふんっ♪……つて、ちよつとお……幾ら何でも、杜乃ちゃんにいきなり『スペシャル』は無謀じゃないかしら……二枚じゃ多分、無理…………つてええええええっ!？」

悲鳴のような声を残して温子が、ばた、ばた、と部屋を飛び出す気配がした。

——待つ事、数分。

その小部屋に戻って来たらしい音がして、すーっ、と下の隙間から崇の学生証が戻されてきた。

「竹之下崇くん、申し込みを **全て** 受理しましたので『七番』の扉からお入りください……な、なお……す、少し、仕度というか、手順というか……ちよ、ちよっと待っていてね……色々、杜乃に教えなくちゃならないから……ま、まさかOKするなんてえ……ああ、そうそう、壁に掛けてあるヘッドセットは必ず装着してくださいっ!」

言うだけ言つて、あた、ふた、と部屋を出てゆく音に続いて別な声があった。

「お次の方……お申し込みを受け付けますので、どうぞっ♪」

次の男子に追い立てられるように受け付けを離れて通路に出ると、哲生が少し興奮気味に訊いてきた。

「お、おい、崇よお……い、幾ら入れたんだっ? ……芦川が『スペシヤル』OKするのって……た、たぶん初めてだぞっ!」

「えっ!?! ……そ、そ、それじゃあ……あ、芦川さんつて、ヴァ、ヴァ、ヴァ……」

逆上擦って訊き返す崇をかわすように哲生が顔の前で手を振った。

「ああ、気持ちちは判るが、たぶん『それ』無いからっ！」

「……………だ、だよねえ……………」

一気に興奮が冷めていったが、こういう“行事”に参加している時点で有り得ない希望(のぞみ)だったろう。それでも、崇にとっては《初体験》に違いなかった。しかも、相手は密かに心揺れ始めている。お隣さん(芦川杜乃)“なのだ。”

(…………お、オーケーしてくれたって事は…………す、少なくとも嫌われては居ないって意味だし…………)

「ナンだよお！…………今度は、ニヤ、ニヤ、しやがってえ？…………まあ、芦川とオマンコできるんだから、無理ねーけどな…………っと、イケねえっ！このコトは内緒にしといた方がイイぜえ？」

急に声を顰(ひそ)めて哲生が崇の肩を抱くようにして囁いた。

「芦川はよ、ちよつとクールってか、取っつき難いトコはあるけどよ、密かに憧れるヤツは多いしな…………崇が『スペシヤル』したなんて知れたら…………マジで、只じや済まねーかもっ？…………良くて、半殺しも覚悟しねーとよっ！」

「お、脅かさないでよう！」

「まあ、俺とオメエが黙ってりやあ大丈夫よっ！…………だからよ、後で俺にだけ教えろよなっ？…………芦川の、マンコの具合をよっ♪」

「な、な、な、なに、言って……っ!?」

真っ赤になった崇の耳元で哲生が下碑た声で囁いた。

「…マンコの絞まり具合、とか……襷の絡みつき具合、とかよっ♪」

「じゃ、じゃあ……こ、東風谷先輩のも……お、教えてよ?」

悔し紛れに崇がそう返すと哲生が何故だか酷く狼狽(うろた)えた。

「んな——っ!?……お、お、俺は……そ、そんな……た、高望みは……し、してねーっ
てええっ!」

「ふええ?」

「だ、だからっ……さ、咲夜っち先輩は……す、す、スペシャルは……う、う、受けねーんだってばよお!」

(もしかして、平嶋くん……断られた事あるのかな?)

崇の考えを見抜いたように哲生が嘯(うそぶ)いた。

「さ、咲夜っち先輩は……だ、誰にも……お、OKしたコトねーんだってばよお!」

(ま、まあ、そういう事にしといてあげよう……)

崇がそう結論づけた時、哲生が立ち止まって言った。

「ほ、ほれ、ここが『七番』だっ!」

いつの間にか平嶋に肩を抱かれてひそひそ話をしながら通路を一番奥まで歩いてきたようだった。見あげると、扉の中央に『七番』とプレートが貼られていた。

改めて振り返ると通路の両側に扉が七個ずつ、合計十四の「個室」がある事になる。三〇枚限定のチケットだと哲生が言っていたから、各部屋で昼休みの間にほぼ二回ずつ『介助』が行われる計算になる。一方、『お当番』は各クラス二人で三クラスの三学年で十八人だ。参加しない女子が居るのかは判らないが、こちらもほぼ一人が二回相手をする計算になる。

「それじゃよ……幾ら払ったか知らねーが、元を取れるように祈ってるぜっ！……何たってよ、咲夜っち先輩と芦川はよ……『スペシャル』受けねえ美形三本指に入ってるから、よっ！」

何やらまだ拘っている平嶋に背を押されるようにして崇は『七番』扉から中に入ったのだった。

その部屋——部屋と呼べるかどうか疑問だが——は、とても狭かった。多分、畳半畳程しかなかった。そして、正面の壁のちょうど腰の高さに五センチ程の「穴」が開いていた。そのカーテンで仕切られた「穴」が意味する処は、流石に崇にも判つ

て、些か、いや、かなり失望感が増した。つまり、相手とは——杜乃とは壁を隔てて繋がるという意味だったからだ。

(え、ええと……た、確か…最初に『ヘッドセット』とかを装着するように……って言ってたな……)

見廻すと右手の壁にそれが掛けられていて、崇が頭に装着するとまるでそれを見越したように直ぐにヘッドフォンから声が聞こえた。

「……う、うん……えと、えつとう……た、竹之下 崇(たけのした たかし)くん……ですね? ……え、えと……き、聞こえますか?」

(う、うわっ! ……ほ、ほ、ほんとに……あ、芦川さんだっ!?)

「……は、はい……き、聞こえまひゅう……」

(や、ヤベっ! ……声、裏返っちゃったっ!)

「……あつ、良かった……え、えと……本日は、わたくし、芦川 杜乃(あしかわ もりの)に『スペシャルコース』をご指名戴き……あ、ありがとうございます……な、名前……い、言わないんだっけ……やだっ……す、スペシャル、初めてだから……き、緊張しちゃうっ……え、えと、わたくし、M・Aをご指名戴き……あ、ありがとうございます……ま、真心込めて、精一杯『介助』させて戴きますので、宜しくお願い致します……はあく……」

溜め息を一つ吐いて彼女が続けた。

「それでは早速始めたいと……思いますが……えと……なに？……時間もタツプリアリますので……いい、いい、いつぱつう……お、お口で……ぬ、又、ぬういた方が……き、気持ち好く……お、おお、お、おお……おまんこ、できると思いますう……」

何かを読んでいるような杜乃の棒読みな台詞に焦りと動揺が滲んでいた。

「……つて、温子ちゃん……な、なに、言わすのよう……あつ！……やだ、マイク入ってた……も、も、申し訳ありません……えと、えつとう……さ、先に、わたくしに……しゃ、しゃぶらせて……ええいつ、もういつ！」

何かを乱暴に破り捨てたような音が聞こえ、微かな咳払いの後にいつもの——いや、まだ幾分緊張感があったが、杜乃の「素の声」がヘッドフォンから聞こえてきた。

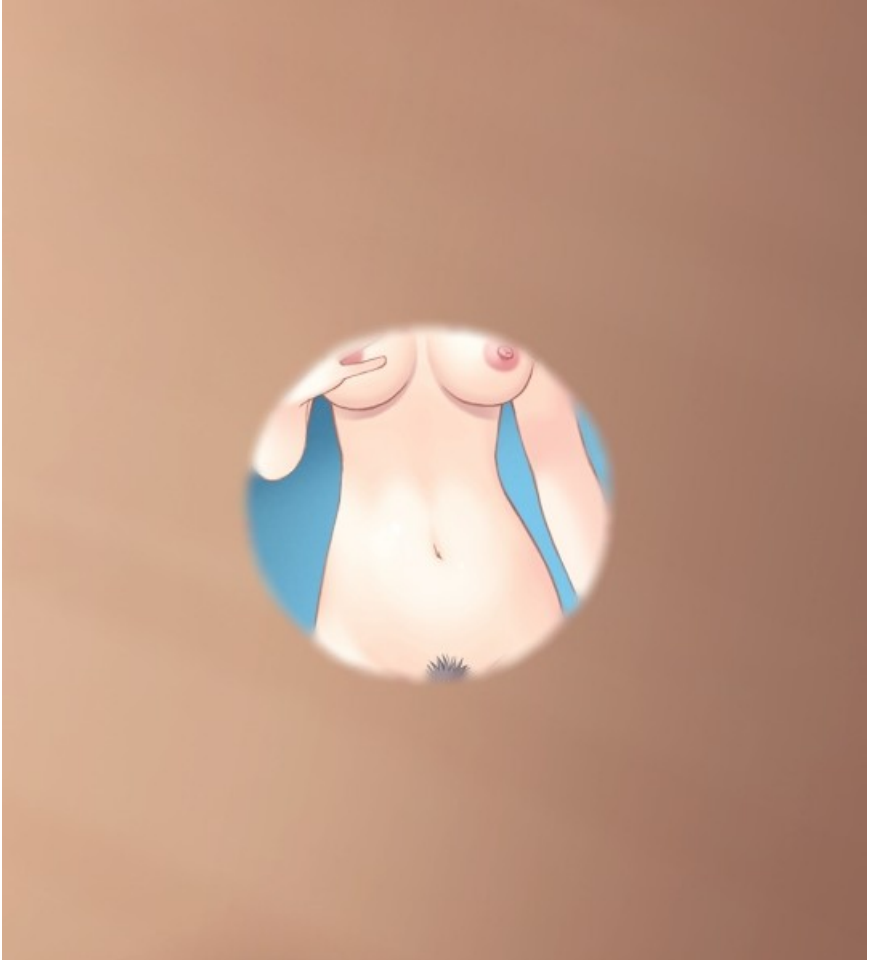
「ごめんね、竹之下くん……まだ、わたし……あんまり慣れていなくて上手にできるか判らないけど……お、おふえらから始めても……いい、いいかな？」

「お、オ、おお、おねぎやい……し、しまふう……」

自分の喉を呪いたくなるほど裏返って上擦った声に崇は頬を染めた。

「それじゃ始めるね……」

杜乃の声が耳に届きカーテンが退かれた。



その小さな穴の向こうに、真っ白い裸身が垣間見えた。形の良い双つの膨らみと下草までが見通せて崇の心臓が、どくんつ、と跳ねあがる。

「……じゃ、じゃあ……その穴から……お、お、お、おちんちんを……だ、だだ、だしくてく
ラさいイ……」

杜乃の声も裏返って、彼女も緊張しているのが判った。

崇はズボンのジッパーを降ろして《逸物》を取りだした。取りだすのに苦勞する程すっかり反り返っていた。

(ちよ、ちよつと、恥ずかしい……)

その気恥ずかしさは、杜乃に見られるからなのか、早くも期待するように完全勃起しているからなのか、判らなかつたのだが。いや、たぶん、その両方だつたのに違ひなかつた。

覺悟を決めてそのちようど腰の高さにある五センチ程の穴に《逸物》を差し入れる。

「ひい!?!……お、大(おっ)きいっ!?!」

息を呑んだような声音とともに杜乃の呟きが聞こえる。

「こ、こんな……お、大(おっ)きいのっ……せ、全部お口になんか……は、入らないよう!?!」

(き、聞こえてるんだけど……)

この『介助施設』に設置されているヘッドセットは、壁の外の男子用は耳をすっぽり覆う高感度のステレオタイプのヘッドフォンで、そこからマイクが口元に向かっている。一方、壁の内側の女子用は「動き易さを考慮（笑）」してインナーイヤータイプの片耳イヤフォンからでた細いコードのようなマイクを頬に貼りつけるワイヤレストタイプである。（↑サツカーのレフリーがしている物と同タイプと思って貰えば良いだろう。）

つまり、『お当番』の口元から奏でられる卑猥な水音から微かな吐息までが男子の耳を経由してダイレクトに彼の脳まで伝えられるのだった。

（……え、えっと……まず……さ、先っぽに……ちゅ、ちゅう、するんだよね……）

杜乃は温子から指導された手順を思い出しながら、そつ、と《逸物》の幹を握った。
（や、やだっ！?!……か、硬い!?!）

勿論、初めて握った訳ではない。《比較対照グッズ》も何本か知っている。

——ちゅっ、ちゅぶっ……

先端に啄ばむようなキスを捧げると《逸物》に、びく、びくんっ、と震えが走った。それを、握った手指から感じ取った杜乃の身体の一番禺で、じゅくんっ、と潤いが生まれた。

(は、恥ずかしいっ!?)

勿論、壁を隔てた崇から見えている訳ではない。それでも杜乃は身を振って膝を擦り合わせた。そして、そつ、と視線をあげる。

そこには——壁穴の内側のすぐ上には、薄型の液晶モニターが設置されていた。そして、向こう側のヘッドセットを掛けてあったフックの陰に隠すように超マイクロカメラが設置されていて、ここに相手の男子の映像を送り込んでいたのだった。

(やんっ♪……た、竹之下くん、両目瞑って仰け反ってるう♪)

真面目一本槍に思えた「お隣さん」の痴態が杜乃の興奮を呼び起こす。

——あむう……う……んっ……じゅるる、じゅぶっ……じゅずずう……

いつの間にか口腔に溜まっていた唾液を塗すように《逸物》を呑み込んでゆく。

「おあう!?!……おおうううっ!?!……き、気持ち、好いっ♪」

杜乃の耳にヘッドセットを通して崇の昂ぶった声が届く。

——ちゅぶっ、ちゅばっ……くちゅっ、ちゅぶっ……くりゅ、くぶっ……ちゅるう、ちゅぶっ……ぢゅるるっ、ちゅぶぶっ……あふっ、はふっ……ぢゅるるっ、くちゅちゅ……ちゅぼっ、ぢゅるるう……はふっ、んんっ……

杜乃は温子から仕込まれたフェラテクで崇を責め始めたのだった。

この『介助のお当番』は強制ではない。一クラス二〇人程が二人ずつ交代で週番を担当するので、二ヵ月半に一回は順番が廻ってくる。その時に、通常の週番業務以外に『介助のお当番』に参加するか否かは自由意志で選択できた。不参加だからといって「イジメ」にあう事はない。そこは『介助委員会』が眼を光らせて監視していたからである。

当然、一回生の頃は参加者は少なかった。しかし、『見学参加』もオーブンで二週目、三週目となれば自発的に参加する女子が増えていった。

何より、「青春のムラムラ」は男子だけの「病」ではないのだから。それに興味だつてある。しかも、『介助内容』に応じた『お手当て』まで貰えるのだ。性病検査は定期的に無料で受けられたし、基本的に『スペシャルコース』の場合はスキンケアが義務づけられていた。

そして、一番のメリットは相手次第・内容次第で『拒否』できる事。しかも、男子からは『壁の向こうのお当番』を視認できないという事だった。『指名』及び『マイクON』がチェックされなかった場合は（必要最低限の言葉を発するだけで済ませれば）男子に自分を確認されずに済むという事である。更に、逆に言えば、マイクだけ指名された本人が付けて行為は別な女子が担当する事も不可能ではない……という事

でもあった。実は、『介助委員会』の女子だけが担当する『現場』では、これを公然と黙認していたのだった。

それは、告白できずに密かに想っている相手と、相手に内緒でエッチしてしまう……という“反則技”を可能足らしめてしまった。そして、これは参加者の飛躍的な増加を齎（もたら）したのだった。

結ばれる事の叶わぬ相手との交わり……。

だから杜乃は『介助委員』の温子の協力の下、半年ほど前、相手に内緒で『ある決断』を実行に移してしまったのだった。

——はぶ……う……ちゅぱっ、くちゅっ……ちゅぷっ、くぷっ……えろっ、れるう……ぴちゅ、ぢゅぶっ……ちゅぶぶっ、ぢゆるるるっ……んん、んぐっ……じゆるるっ、ちゅぶっ……んっ、んふっ……んぶぶぶっ、んぶう……あふっ、はっ……あふう……

杜乃は温子から指示されたように上目遣いでモニターを確認しながら、祟が強い反応を返した処を重点的に責めていた。

しかし、些か顎が疲れてきたその時だった。『介助室』側の扉が開いて誰かが入ってくる気配がした。

「杜乃ちゅわくん、具合はどっかなくっ？」

聞き慣れた声に杜乃が《逸物》を吐き戻すと、温子が呆れたような声をあげた。
「うわっ!?!…………で、デカっ!!」



「だよねっつ♪…………わたし、顎が疲れちゃったよう!?!」

照れ混じりで、うん、うん、と同意するように頷きながら振り返った杜乃は、温子の姿に些か不審気に眉を吊りあげた。

「な、なんで温子ちゃんまで、すっぱんぼんなのよう？」

実は、杜乃は半年ほど前に『ある決断』を実行に移して以来、今までにも何回か相手に内緒で『お当番』を実践していた。二回目以降はフェラだけだったが、その都度、狭い部屋の中で折り重なるようにして温子が『声』を担当しながら杜乃にレクチャーしていたのだが、当然、二人とも服は着ていた。

「い、いや、まあ……それより……」

何気に杜乃の言葉をスルーして温子は壁に掛かっていたもう一つのヘッドセットを手を取った。

この『七番ルーム』は別名『ビップルーム』と呼ばれていたのだが、何処がビップかと言えば、他の部屋が『お当番』一人がやっと動けるスペースしかないのに比べて、この部屋は二人が充分に活動できる広さがあったのである。

そして、この部屋では極々限られた“上得意さま”だけに内緒で『3P』（と言うか、『二人介助』？）を提供していたのだった。尤も、それには最低でも“諭吉三枚”が必要だったのだが。

そして、胡乱気(うろんげ)に見詰める杜乃と視線を合わせずにヘッドセットを耳に装着した温子が崇に呼び掛ける。

「崇クンってば……この《宝刀》で、何人の女子を泣かしたのよお？」

「……そ、そ、そんなコトは……し、し、してまふえん……そ、それより……な、な、なんで……な、中台さんまで……い、居るんへふかくっ！」

些か上擦っつて裏返った崇の声に杜乃が相槌を打った。

【中略】この後、杜乃と温子にダブルフェラされて……

「ほらあ、フィニッシュはバキュームでしょ？」

いつも温子はマイクをOFFにして杜乃にレクチャーしていたのだが、今日はわざと崇に聞こえるようにONしていた。それには気づいていた杜乃が羞恥に身を振る。

「今日はちゃんと『ごっくん』するのよお？ ……吐きだしたりしたら、『お手当て』あげないからねっ♪」

(そ、それは別に……ど、どうでも……い、良い……けど……)

杜乃にとって内緒のレッスンは(『お手当て』が目当てではなく)『ある決断』を

実行に移した相手との『二回目』の為だったのだが、結局それは叶えられぬまま今日に至ってしまった。もしかしたら、彼は相手が杜乃だと気づいていたのかも知れなかった。

そして、杜乃は今日、＼お隣さん＼相手に『スペシヤル』をすんなりOKしていた自分の心を計り兼ねていた。

(あ、温(あつ)ちゃんが強引に…は、話を…す、進めたからで…)

必死に心裡で答を導きだそうとする杜乃に、しかし、温子は時間を与えてはくれなかった。

「ほらあ、ぱつくんしてっ！ ……崇クンもお待ち兼ねよお♪」

「う、うん…」

根元を握り直して視線を遣れば、温子の唾液で、ぬる、ぬる、になった《逸物》の先端に透明な液体が玉を作っていた。いつもは相手の《ペニス》にスキンを被せていたので気づかなかつたのだ。例の『最初の時』はそれ処ではなかつたし…。

不思議そうに見遣る杜乃に気づいて温子が言った。

「そうね、先ずはその先走りを舐め取って、ごつくん、しなさいっ♪」

(そうだった……《先走り》って言うんだっけ……た、確か…お、男の子も、気持ち

好いとでてくる……んだよ……ね……)

「えろっ、れるう……じゅずっ、じゅるるっ……ん、んくんっ……あ、あふ……」
舌先を伸ばしてその透明な液体を掬い取り、こくんっ、と喉を鳴らす。

(……あ、あんまり……《味》は……無い……かな? ……ちよっち、苦い……)
冷静な分析をする杜乃の鼻先で《逸物》が、ぴく、ぴくんっ、と震えた。

(……や、やだ……き、気持ち、好い……のか……な?)

上目遣いで視線をモニターに投げると崇が身を振っているのが見えた。

——はむんっ、んぶっ……じゅるっ、じゅずう、ずずずっ……

口腔に膨らんだ雁首を啜え込んで吸い立てる。

またも《逸物》が、びく、びくんっ、と口腔で暴れた。

過去数回の《経験値》しかない杜乃でも、崇がイキそうなのが感じとれた。

——ぢゅずずう、ずずずう……じゅるっ、ぢゅぶぶぶう……

頭を前後に振って杜乃が《崇》を吸い立てる。

「おあう?! ……わひゃあうっ?!」

杜乃の口腔で《崇》が切羽詰ったように震え、杜乃のイヤフォンに感極まった声を送り込む。それが杜乃の情動にも火を点ける。

——ずぶう、ぢゅずずずう…んぐつ…じゅぶるっ、ぢゅぶぶぶう……

喉奥まで呑み込むたび、膨らんだ《逸物》の先端が気道の取っつきを穿ち続ける。それでも杜乃は両目をきつく瞑って息苦しさを堪えて《彼》を吸い立てる。

——ぢゅぶぶぶう、ぢゅずずずう…あふっ、はふっ…じゅぶるるるっ、ぢゅぶぶぶう…はふっ、んぐつ…ぢゅぶるるるっ、じゅぶぶぶう……

鼻から抜ける呼気が崇の陰毛をそよがせる。口端から溢れた唾液が喉を伝い真っ白い乳房を濡らす。

そこへ、そろっ、と伸びた温子の手指が杜乃の乳房を鷲掴んだ。

(いぎゅうううううっ!?)

突然の温子の攻撃参加に杜乃が身を振り、それは計測不能なランダム口撃(笑)を崇の《逸物》に齎(もたら)したのだった。

「ああっ……だ、だだ、ダメっ!?!……で、で、射精(で)ちやううううっ!?!」

泣きそうな声で訴える崇の身体が立ったまま仰け反って、がく、がくっ、と震える。

「いいのよっ♪……杜乃のお口に、いっっぱい、射精(だ)すのよお♪」

「あああっ、あうううっ……んぐ、んぐ、ゴメンっ!?!……で、射精(で)るっ 射精(で)りゅううううううううううっ♪」

両の目尻に涙の珠を浮かべて杜乃が視線で温子に是認を訴える。

「まあ、は・ち・め・て、のお……お口フィニツシュ、だものねえ？」

温子が溜め息交じりに言葉を吐いた。杜乃に言ったのか、崇に言ったのか、あるいは二人に言ったのかも知れなかった。

そして、温子が頓狂な声をあげた。

「やだ〜っ♪……見て、杜乃お!? ……まだ、おつきしたまんま……っつか、さつきより大(おっ)きいんで、な・あ・いつ? ……んじゃあ、続けていつてみよ〜っ♪」
(……ひっ、ひいひいひいっ!? ……ん、ん、こ、こんなの、無理〜っ!?)

改めてその《逸物》の太さと長さに尻込みする杜乃の腰を抱えあげるようにして四つん這いにさせると、温子はこちらの部屋に用意してある机の位置を調節した。

この『介助』の『スペシャルコース』の場合、男子は壁の向こうから腰を前後に振る事しかできない。当然、女子の身体を支える事など不可能なので、女子は突きあげに揺さ振られる身体をその机にしがみついて自分で支えるのだ。

「ほら、杜乃っ……お尻を突きだして〜っ♪」

元来、自己主張する事が苦手な杜乃は温子の指図に否も応もなく流されてゆく。

机に掴まって腰を高くあげた杜乃の柔尻を持ちあげるようにして股間を覗き込んだ

温子が、わざとらしい声をマイクに送り込む。

「やあくんっ ♪ …… 杜乃のおまんこ、とろつとろ、に解れてるじゃないよお ♪」
(し、しし、知らないわよっ!?)

恥ずかしそうに揺れる尻肉を鷺掴んで温子が言った。

「あっ! …… そうだ、崇クン …… おまんこ、見たいよねっ?」

(ひいっ!?)

その体勢では、見られるのは間違いなく杜乃である。

「あ、ああ、温(あつ)ちゃんが …… み、見せれば …… いい、良い …… じゃない ……」

必死に声を搾りだして身体を起ここそうとする杜乃の尻肉を掴んで押さえ込んだ温子が訊いた。

「崇クンは、どおう? …… あたしとお、杜乃とお …… どっちのおまんこが、見たいかなっ?」

返事の代わりに、ぐびっ、と崇の喉が鳴る音が二人のイヤフォンに届いた。

「んふっ ♪ …… 杜乃だっつてえ ♡」

(…… いい、いい、言っつて …… ない …… から …… っ!?)

尚も『壁穴』から股間を遠ざけようと身を振りながら杜乃が言い募る。

「だ、だだ、だって……そ、それ……き、規約違反う!？」

確かにこの『介助』の規約には男子が『壁穴』から覗いたり指を差し入れたりする行為は禁止すると記されていた。

「ナニ言ってるのお! ……大枚叩(はた)いてくれた “御大尽(おだいじん)さま” に、それくらいサービスはするモンですよ♪」

「だ、だったら……『介助委員』の……あ、温(あつ)ちゃんが……み、見れば……良いじゃない……」

「バカねっ! ……あたしのおまんこじゃあ、サービスにならないってのっ!」

「わ、わわ、わ、わたしの……もう……な、ならにやいい!？」

声を上擦らせた杜乃の言葉は意味を伝えていなかった。

「崇クン、一旦 オチンポを穴から抜いてね………ほら、杜乃っ! ……見て戴くのよっ♪」

崇が《逸物》を引き抜いた『壁穴』に向かって、温子は杜乃の腰を抱えあげるようにして股間を晒してしまった。

(ひいっ!?! ……あ、温(あつ)ちゃんのバカ——っ!?)

身を振って抵抗するのだが、体育会系の温子に文化系の杜乃が敵う訳がなかった。

「小陰唇のビラビラもお、おピンク色でえ綺麗でしょお♪……膣内(なか)はもっと綺麗だから、ねっ♥」

「ひ、ひひひ、ひ、広げちゃ、だめ——っ!?!」

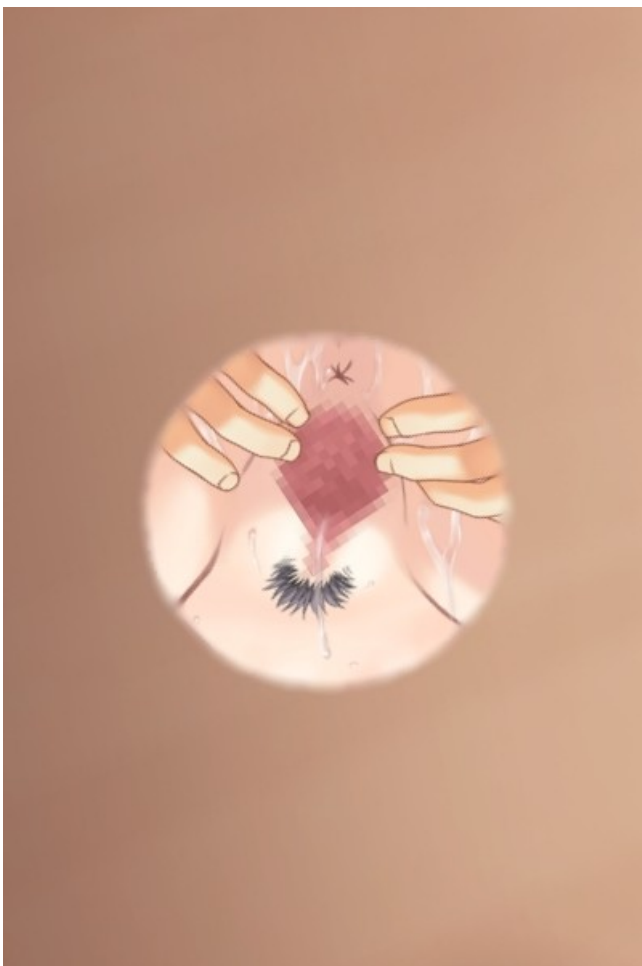


上から押し掛かるようにして身体を固定された杜乃は、為す術もなく温子の手指で

秘唇を寛げられてしまったのだった。

その時、つう——つ、と愛液が滴り落ちて、ぴちよんつ、と床が鳴った。

(い、い、厭——っ!?)



両手で口を押さえて悲鳴を呑み込んだ杜乃の身体が硬直する。

「どうか、崇クン？……おまんこ見るの、初めてだよねっ？……お姉さん、感想が聞きたくいつ♪」

「す、す、すつごく……き、綺麗で……か、感動しましたっ！」

（ば、ば、莫迦、ばかーっ!? ……竹之下くんの、えっち~~~~っ!?）

声を上擦らせて答える崇の声に杜乃が身を振り、温子が不思議そうに訊いた。

「崇クン、どうして触らないのお？」

「い、いいい、いいっ……い、良いんですか？」

（だ、だだ、だ、ダメにきまつ……）

慌てて拒否の意思を言葉にしようとした杜乃より先に温子が答えていた。

「もっちろん、いいわよお♪」

（ひいいいいっ!?）

温子が愉しそうに許可を与え、杜乃が真っ赤になって慄（おのの）いた。

「指二本は楽勝で挿入（はい）るからねっ♪」

「だ、だだだ、だ、ダメ——っ!? ……い、い、一本にしてっ！」

（——って、アンター一本はOKなんかいっ!?）

杜乃の必死の「お願い」に危うく温子は吹きだす処だった。

「ゴメンネ、崇クン……………うぷっ……………一本にしてあげてっ♪」

それでもその「お願い」が届いたのか、つぶんっ、と中指だけが膾口を潜った。

「うう……………き、きついっ!？」

「ちよつとお、杜乃お? ……あんた、なに、おまんこ絞めつけてるのよお?」

「し、しし、し、してない……………よう……………あひい、らめっ……………きゅふううっ!？」

躊躇(ためら)いがちに捏ねる崇の中指に杜乃が身を振る。

「あれっ? ……そういえばあ……………杜乃のおまんこに指を挿(い)れたのって、崇クンが初めて、かにゃんっ?」

何気に呟いた温子の言葉に杜乃の膾壁が、きゅくんっ、と指先を締めつけた。

「おわっ!?!……………し、絞まるう!？」

「あははっ……………杜乃ってば、おまんこで返事してるしい♪」

(ば、ば、莫迦、ばか、バカ……………!?)

「それじゃあ崇クン、ついでに杜乃の《初クンニ》も、貰つとくう?」

温子の言葉に杜乃の身体がまた硬直した。

最早、杜乃は温子の掌の上で踊らされる産まれたてのヒヨコだった。拒む術も知らず、逃げる羽根もなかった。

「そ、そ、それってええっ!? ……な、な、な、なめ……」

「そうよお♪ ……おまんこをおベロで、れる、れる、するのお♪ ……崇クンにとつても、勿論《初体験》よねえ?」

「は、はは、は、はいい!?」

上擦った声が届き、ぬぼんっ、と中指が抜き取られた。その中指と杜乃の膣口の間、つう——つ、と糸が引いて崇の心臓が、どくんっ、と跳ねる。

「そ、それレは……し、失礼ヒて……な、舐めさせていただきやまふう……」

声を裏返して、それでも生真面目に断る崇の声に杜乃が羞恥に身を振る。

——れるっ、えろっ……ぴちゅ、るろう……

躊躇(ためら)いながら崇の舌先が杜乃の膣口の粘膜を舐めあげる。

「ひいんっ……あっ、んんっ……」

齎(もたら)された触感、杜乃に快感よりもどかしさを募らせる。

——んぶっ、じゅるっ……じゅずう、じゅるっ……んくんっ……

しかし、マイクが拾う卑猥な水音が杜乃に新たな昂ぶりを齎(もたら)した。

(ひいっ!? ……す、啜っちゃ、いや〜っ!?)

杜乃の背筋が、びく、びくっ、と慄(おの)のき身体が一番奥で、じゅくんっ、と新

たな潤いが生まれる。

——あふっ、じゅずずっ……れるう、じゅるるっ……

それをまた崇が啜りあげる。

「杜乃のお味は、どっかなさうっ？」

「し、舌先に……ぴり、ぴり、きて……こ、興奮しますう!？」

「じゃあ、広げててあげるから、オチンポ挿(い)れよつかうっ♪」

その言葉を待ち侘びていたように崇が立ちあがる。いきり勃つ《逸物》を押さえつけるように握って『壁穴』に狙いを定める。

「挿(い)れるトコ、判るよねっ♪」

愉しそうに言ってから温子は揶揄(からか)うように続けた。

「杜乃のおまんこ、まだ二回目だから……ちよくつち、狭いかもしれないけど、もう道は通っているからねえ……安心して突っ込んでねっ♪」

(ば、ば、莫迦、ばか……温(あつ)ちゃんの、バカうっ!?)

杜乃の膣口の粘膜が、ひく、ひくっ、と恥ずかしそうに蠢いた。

崇はもう一度《膣口》を確めるように『壁穴』から覗いて《逸物》の先を『穴』に差し込んだ。

通常であれば差し込まれていた《ペニス》に『お当番』さんが狙いをつけて受け入れるのだが、『壁穴』越しに温子が押し広げた《膣口》を目差して崇の《逸物》が進んでいった。

それでも躊躇（ためらい）がちに《膣口》の粘膜に《逸物》の先を触れさせた崇に、温子が協力を惜しまない。

杜乃の腰を掴んで狙いあやまたず《逸物》を迎え入れたのだった。

「んっくうううううううんっ♪」

杜乃の背筋を情動が、びく、びく、びくんと駆け昇っていった。

狭隘（きょうあい）な未だ二度目の細道が崇の《逸物》に拡張を余儀なくされて、ぎち、ぎちち、と締めあげる。

「おわああう!?!……し、締めつけ、きつううっ!?!」

壁を一枚隔てた向こうで崇が切なそうに呻いた。

そして、温子がマイクに向かって高らかに宣言したのだった。

「さあ、崇クンっ!……ズコ、バコ、開始よお♪」

申し訳ありませんが体験版はここまでです。

こちらの体験版にて、作品の雰囲気などをご確認戴けたらと思います。
本篇では、この後はノンストップでエッチシーンです。

お気に召しましたら、本篇もどうぞ宜しくお願い致します。